

開会挨拶

松原 洋子

○松原 皆様、おはようございます。

定刻になりましたので、ただいまから立命館大学人間科学研究所年次総会、「研究者のライフ・イベントとワーク・ライフ・バランス」を開催いたします。

私は、人間科学研究所所長の松原洋子と申します。どうぞよろしく願いいたします。開会に当たって、ご挨拶と本日のプログラムについて簡単にご紹介させていただきます。



人間科学研究所は、立命館大学衣笠キャンパスの衣笠総合研究機構に属する研究所の一つです。「対人援助」をキーワードに幅広く研究活動をしております。理論的・基礎的研究ももちろんですが、特に臨床・フィールドで、市民の方や障害のある方、高齢者といった方々と一緒にプロジェクトを進めるところも特徴でございます。

毎年、年1回こういった催しを開催しております。例年は、プロジェクトの発表会が中心になっておりますが、今年は少し趣を変えまして、研究者の生活、仕事、そして研究に関わる問題について、「これまで」と「これから」を視野に入れて皆さんと考え、議論していきたいと思っております。

まず午前中は、第1部としまして2つの講演を予定しております。まず、基調講演として立命館大学総合心理学部の仲真紀子先生に「女性研究者とワーク・ライフ・バランス」と題してお話しいたします。

今スライドで映しているのは、仲先生そして久保（川合）南海子先生が編者となって2014年に出版された『女性研究者とワークライフバランス—キャリアを積むこと、家族を持つこと』¹⁾です。これは心理学の研究者たちが、研究と生活をどのように両立しているのか、やりくりしているかといったことについて、女性研究者だけでなく、育児休業をとった男性研究者の起稿も含めて、非常に多様な研究者のワークライフバランスについて報告しておられます。

仲先生は心理学がご専門ですが、人間科学研究所では、プロジェクトとして

司法面接支援プロジェクトというのを展開しておられます。犯罪に巻き込まれた子供さんに対して司法的な面接をするときに、やはりいろいろな問題が起こるといことで、そういったところでどのように対応していくべきか等のご研究を、心理学の専門家の立場から実践面も含めてしておられます。

私はこの本を拝見して、すごくおもしろかったので、赴任されたばかりの仲先生にぜひこの機会にご自身の一研究者としての歩みと、ワーク・ライフ・バランスという観点からのお考えを伺いたいと思ひまして講演をお願いしました。

続いて、リサーチライフサポート室というのが立命館に最近できたのですが、そちらの室長をされている立命館大学特命教授の田中弘美先生にお話しただきます。ご専門は情報工学で、バーチャルリアリティーを非常に早い時期から研究されてきた第一人者でおられます。理工系分野では、女性研究者の研究環境や権利に関するネットワークが早くから構築されております。そういった背景を踏まえて、本学でも幅広く女性研究者を支援する施策に取り組んでおります。田中先生には、女性研究者支援の動向と立命館大学の取り組みについてお話しただきます。

なお、男女共同参画と言っておりますけれども、広い意味ではダイバーシティ研究環境整備という観点でして、元気な男性の研究者を基準にしたような研究環境に穴をあけて、多様な背景を持つ人たちが伸び伸びと研究できるような、そういう環境を実現していきたいという、構えが基本的にはございます。その一環としてのいわゆる男女共同参画ですが、もちろん人間は男女と分けられるだけではなく、さまざまなジェンダーがあるわけです。ですから、女性に特化したというように見えるかもしれませんが、標準的な研究者像の周縁におかれてきた人たちをどうサポートするかといった観点で考えたいと思ひます。

なお、講演後の昼休みに、この建物の5階、産学交流ラウンジで人間科学研究所の活動について発表するポスターセッションがあります。連携する生存学研究センターの関係者の発表もあります。軽食を用意しておりますので、研究者と議論を楽しんでいただければと思ひます。

また、14時からこの同じ会場でパネルディスカッション「研究者とワーク・

ライフ・バランスの今後」を行います。こちらは「これから」をポイントに、立命館大学産業社会学部教授の筒井淳也先生に問題提起をしていただきまして、幅広くディスカッションしていきたいと思っております。

それでは、早速、仲真紀子先生にまず基調講演をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

注

- 1) 仲真紀子・久保（川合）南海子（編）『女性研究者とワークライフバランス——キャリアを積むこと、家族を持つこと』（新曜社、2014年）